

「蹄葉炎への限りなき挑戦」
- 蹄病専門医 (Podiatrist) による蹄葉炎治療 -

講演者 : Dr. Scott Morrison DVM (Rood and Riddle Equine hospital, USA)

座長 : 桑野睦敏 (JRA 競走馬総合研究所)

Scott Morrison 先生は、蹄病を専門とする装蹄師・獣医師であり、Rood and Riddle Equine Hospital Podiatry Department のオーナーである。そこでは6名の装蹄師・獣医師、5名の装蹄師、2名の技工士が従事している。ケンタッキーという場所柄、サラブレッドの競走馬・繁殖馬の診療が多いが、乗用馬をはじめとして大型の馬車馬やポニーなどあらゆる品種の馬も診ている。その豊富な症例数と柔軟な発想から、色々な種類の蹄鉄を開発したり、より良い治療方法を模索したりしながら、多くの蹄病に対してチャレンジを続けている。現在アメリカ国内ばかりではなく、ドイツ、フランス、オーストリア、イギリス、メキシコ、ブラジル、アルゼンチン、カナダ、ニュージーランドなどで蹄病学についての講義や技術指導をしている。また、AAEP、North American Veterinary Conference、International Hoof Care Summit などの学会でも、積極的に発表をしている。プライベートでは乗馬を趣味としており、ポロ競技馬を調教し、現役選手として活躍している。

今回は「蹄葉炎治療」をテーマとして、基本的な病態に始まり、それぞれのステージによる治療や装蹄療法、最新の治療方法について紹介する。

<経歴>

- 1990-1995 バージニア工科大学
- 1995-1999 バージニア・メリーランド獣医科大学
- 1999-2000 Rood and Riddle Equine Hospital : インターンシップ
- 2000-現在 Rood and Riddle Equine Hospital : 蹄病センター代表

<表彰>

- 2006 International Hoof Care Summit 優秀指導者
- 2006 The International Equine Veterinarian 殿堂入り
- 2008 North American Veterinary Conference 年度優秀発表者

<蹄葉炎について>

蹄葉炎では、表皮葉組織が障害を受けると、基底膜異常が基礎となって表皮

葉と真皮葉の接着が阻害される。結果的に、末節骨（蹄骨）を固着している蹄壁真皮が蹄壁から剥離するため、多くの場合、蹄骨が変位する。蹄底真皮は、変位した骨と蹄底角質に挟まれることにより血行が阻害され、血流の末梢にあたる真皮葉も含めて真皮組織が挫滅する。症状の進行によって激しい疼痛を生じるが、経時的に疼痛が軽減して慢性経過をたどるものも少なくない。

蹄葉炎発症馬に対しては、急性期における炎症の程度を最小限にとどめ、慢性期にはその状態にあった適正な管理をしなくてはならない。そのためには、蹄の構造・支持機能・生体力学などを正しく理解する必要がある。蹄葉炎治療・管理の成功は、正常な蹄とのメカニズムの違いを理解することから始まる。

適切な画像による早期かつ正確な診断により評価できれば、蹄葉炎のカテゴリーや急性・慢性の位置づけが可能となり、より良い治療を計画的に実施する助けになる。また、疼痛が軽減している慢性蹄葉炎で再度症状が悪化した場合にも、いかに適正な治療や外科処置を行うかがその予後を左右することは言うに及ばない。治療過程では、可能なかぎりこまめに蹄骨変位のモニタリングを行うのが良く、このことが治療の成功をもたらす。

蹄葉炎に罹患した馬を回復させるには、何事も不可能ではないと思い挑戦する獣医師と装蹄師、馬管理者の協力が必要である。